

貴州トン族の高床住居と集落構成に関する調査と研究（2） （梗概）

貴州トン族住居調査委員会
代表 田中 淡

1. はじめに

1-1. 調査の経緯

一昨年の『研究年報』で報じたように^(註1)、本委員会は貴州トン（侗）族の高床住居を対象とする調査と研究を進めてきた(研究 No. 8815)。88年度の2度にわたる予備的調査では、黔東南苗族侗族自治州を広域的に踏査して、トン族のほかミャオ（苗）族・パイ（布依）族・漢族の民居・民族建築を合わせて50棟実測調査し、貴州東南部の建築的狀況をおおむね把握することができた。

これを受けて89年度は、対象村落を1カ所に限定した集中的悉皆調査をおこなうべく準備を進めてきたが、89年6月6日に勃発した天安門事件の影響が大きく、同年度内に調査を実施するのは不可能と判断され、調査・研究のプログラムは丸1年延期されることになった^(註2)。かくして、本稿は、1年遅れの本年報に掲載されることになったのである。

さて、第3次調査を実施するに先立って、とくに問題となったのは、対象村落の選定とその測量である。これについては、第2次調査で多くの新知見をもたらした、都柳江沿岸の従江県巨洞寨がまずは有力な候補地となったが、戸数が150を超える大集落であるため悉皆調査は不可能と判断し、断念した。ついで、貴州省民族研究所に所属する共同研究者の黄才貴氏（トン族）の推薦もあって、巨洞の隣村である郎洞寨が候補地となった。しかし、杭を打ちこむトラヴァース測量が、村落の規範となる龍脈（風水）の禁忌^(註3)に触れるという理由で、測量と調査に対する村人の同意をえることはできなかった。

そのつぎに候補地となり、現実に調査対象村落となったのが、巨洞や郎洞の20kmほど上流に位置する蘇洞上寨である。蘇洞にも禁忌の問題を気にする村人がいることはいたのだが、いくぶん都市部に近くて漢化されているせいもあり、村長をはじめとする村人の多くは、我々の調査に対して寛容であった。

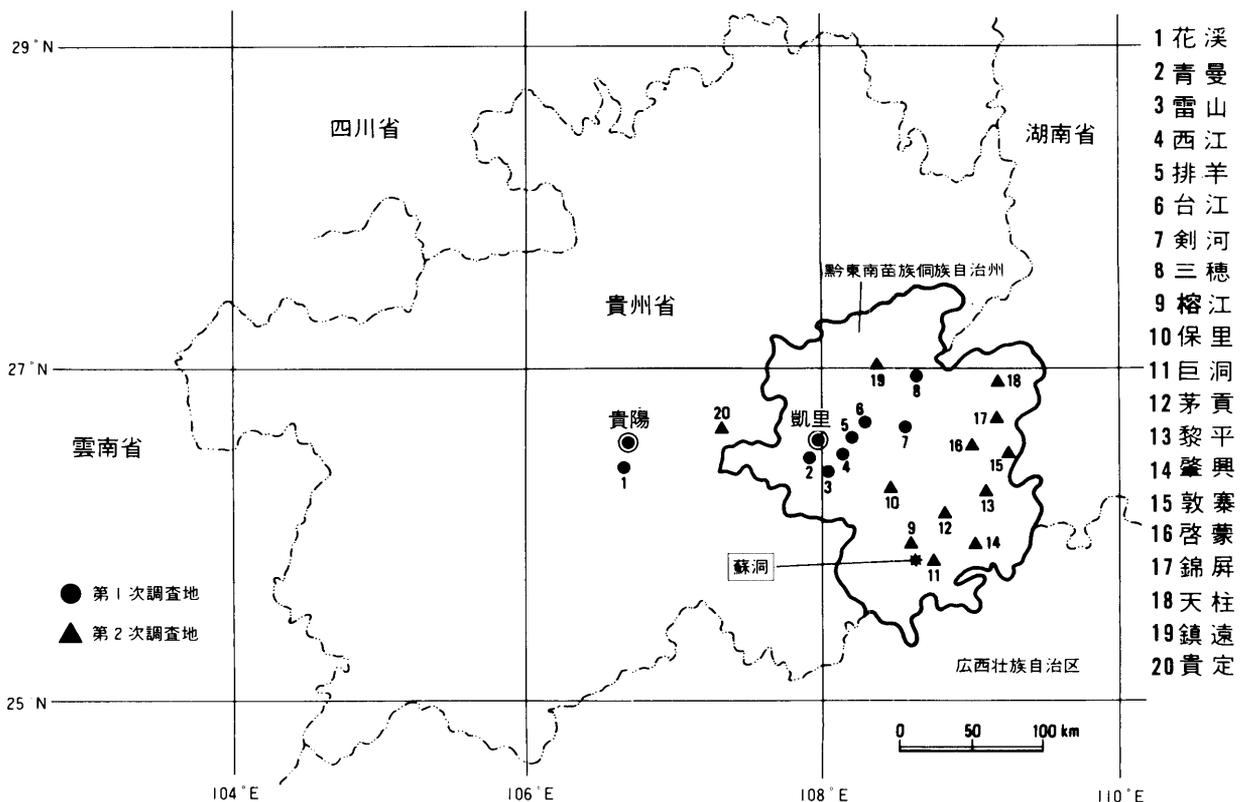


図1 調査位置

蘇洞の地形測量は、共同研究者の羅徳啓氏が院長を務める貴州省建築設計院に依託し、王克安氏を隊長とする測量隊が1990年の4月下旬から5月上旬にかけて実施した。この測量によって、1/500の家屋配置図が作成され、

集落調査の際のベース・マップとなった。

蘇洞での調査は10月12日に始まり、10月28日に終了した。参加した調査員は、田中淡・江口一久・巽淳一郎・浅川滋男・島田敏男・羅徳啓・譚鴻賓・金珏・黄才貴の

表1 実測家屋一覧

家屋	世帯1	世帯2	世帯3	建築機能	床形式	平面	架構形式	屋根	建築年	穀倉	かまど
S ₀₁	呉 佩賢 (54) 5人	呉 佩強 (45) 5人		住居	吊脚楼	3間片側妻庇付堂屋あり	5柱9瓜穿闘式	入母屋杉皮葺	1988	別棟S _{01k} ・2階にも	
S ₀₂	潘 志忠 (40) 6人			住居	高床	2間堂屋なし	5柱6瓜穿闘式	切妻杉皮・茅葺	1989(9月)	床下	床下(囲炉裏と併存)
S ₀₃	石 万良 (39) 5人			住居	高床	2間片側妻庇付堂屋あり	5柱8瓜穿闘式前面吊瓜	入母屋杉皮葺	1979(8月)	床上	
S ₀₄	石 政徳 (30) 5人			住居	高床	1間片側妻庇付堂屋あり	5柱8瓜穿闘式前後吊瓜	入母屋杉皮葺	1975		
S ₀₅	石 占清 (72) 3人	石 万強 (27) 3人		住居	高床	2間片側妻庇付堂屋あり	5柱8吊瓜穿闘式前面吊瓜	入母屋杉皮・茅葺	1979	床上(石占清)	
S ₀₆	石 万明 (39) 5人			住居	土間	1間堂屋なし	棟持柱式	切妻茅葺	1989		
S ₀₇	林 肇基 (71) 8人			住居	高床	3間片側妻庇付堂屋あり	5柱8吊瓜穿闘式前面吊瓜	入母屋杉皮葺	1968	床上	床上
S ₀₈	趙 光輝 (26) 4人	趙 光徳 (20) 2人	趙 光強 (28) 5人	住居	吊脚楼	3間片側妻庇付	5柱8瓜穿闘式前面吊瓜	入母屋杉皮葺	1985		
S ₀₉	林 世民 (56) 6人			住居	高床	2間片側妻庇付堂屋あり	5柱8瓜穿闘式前後吊瓜・背面増築	入母屋杉皮・茅葺	1956	床上	床下(家畜用)
S ₁₀	石 成雲 (72) 4人			住居	高床	2間片側妻庇付堂屋あり	5柱8瓜穿闘式前面吊瓜	入母屋茅・杉皮葺	1963	床上	床下(家畜用)
S ₁₁	石 万年 (43) 8人			住居	高床	2間堂屋なし	3柱2瓜穿闘式	切妻杉皮葺	1973		床下
S ₁₂	石 万年 (43) 8人	石 万全 (28) 3人		住居	高床	2間片側妻庇付堂屋あり	5柱8瓜穿闘式前後吊瓜	入母屋杉皮葺	1956	別棟S _{12k} ・床上にも	
S ₁₃	石 国元 (45) 6人			住居	土間	2間堂屋あり	5柱8瓜穿闘式前面吊瓜	切妻茅・杉皮葺	1983		
S ₁₄	石 金蓮 (65) 6人			住居	高床	1間片側妻庇付堂屋あり	5柱8瓜穿闘式前面吊瓜・背面増築	入母屋瓦・杉皮葺	1970		床上
S ₁₅	呉 江培 (32) 7人			住居	高床	2間片側妻庇付堂屋あり	5柱8瓜穿闘式前後吊瓜	入母屋杉皮葺	?	床上	
S ₁₆	趙 光華 (45) 7人			住居	高床	2間片側妻庇付堂屋あり	5柱8瓜穿闘式前後吊瓜・背面増築	入母屋杉皮葺	1972		
S ₁₇	呉 景勝 (44) 7人			住居	土間	2間堂屋あり	4柱3瓜穿闘式	切妻杉皮葺	1966		1F厨房(囲炉裏と併存)
S ₁₈	呉 景勝 (44) 7人			住居	高床	2間堂屋なし	5柱6瓜穿闘式	切妻杉皮葺	1988		
S ₁₉	石 成勝 (72) 2人			住居	土間	1間片側妻庇付堂屋なし	3柱4瓜穿闘式	切妻杉皮葺	1978		
S ₂₀	石 国章 (40) 5人			住居	土間	1間片側妻庇付堂屋なし	5柱4瓜穿闘式	切妻杉皮葺	1986	1階(低い床の上)	
S ₂₁				閩牛房	土間	1間	3柱2瓜穿闘式	切妻杉皮葺	1980		
S ₂₂	石 (死亡) 6人			住居	高床	2間片側妻庇付堂屋なし	5柱6瓜穿闘式前面吊瓜	入母屋杉皮葺	?	別棟S _{22k}	床下(家畜用)
S ₂₃	石 金蓮 (65) 6人	石 国明 (44) 5人		住居	楼閣	2間堂屋あり	4柱3瓜穿闘式	切妻杉皮葺	1956	2階(石国明)	1階(石金蓮)
S ₂₄	呉 紹徳 (32) 4人			住居	土間	1間片側妻庇付堂屋なし	3柱4瓜穿闘式	入母屋杉皮・茅葺	1984		
S ₂₅	石 万銀 (33) 4人			住居	高床	2間片側妻庇付	5柱8瓜穿闘式前面吊瓜	入母屋杉皮・茅葺	1950前後	床上	床下(家畜用)
S ₂₆	石 (死亡) 0人			住居	土間	1間堂屋なし	3柱2瓜穿闘式	切妻杉皮・茅葺	1978		
S ₂₇	呉 紹強 (37) 5人			住居	土間	2間堂屋なし	3柱2瓜穿闘式	切妻茅・杉皮葺	1984		
S ₂₈	潘 志亮 (38) 4人			住居	土間	2間堂屋なし	3柱6瓜穿闘式	切妻茅・杉皮葺	1979		
S ₂₉	朱 先髪 (47) 8人	朱 先富 (45) 6人		住居	高床	3間片側妻庇付堂屋あり	5柱8瓜穿闘式前面吊瓜	入母屋杉皮・茅葺	1970前後	床上(朱先富)	床上(朱先富)
S ₃₀	石 家強 (26) 3人	石 成玉 (72) 4人		住居	高床	2間両側妻庇付堂屋あり	5柱8瓜穿闘式前後吊瓜・背面増築	入母屋杉皮葺	1950	床上(石成玉)	床上(石家強)
S ₃₁	廖 老歳 (死) 1人			住居	土間	1間堂屋なし	棟持柱式	切妻杉皮葺	1990		
S ₃₂	石 家亮 (38) 5人	石 家成 (33) 4人		住居	吊脚楼	3間片側妻庇付堂屋あり	3柱6瓜穿闘式・前廊付加	入母屋杉皮葺	?		1階
S ₃₃	石 国榮 (38) 5人			住居	土間	1間片側妻庇付堂屋なし	3柱2瓜穿闘式	入母屋杉皮・茅葺	1978		
S ₃₄	潘 志明 (38) 4人			住居	高床	1間片側妻庇付堂屋なし	5柱4瓜穿闘式	入母屋杉皮葺	1978		
S ₃₅	呉 紹成 6人			住居	土間	2間堂屋なし	棟持柱式	切妻杉皮葺	1985		
S ₃₆	林 輝 5人			住居	吊脚楼	2間堂屋なし	4柱6瓜穿闘式前面吊瓜	切妻杉皮・トタン葺	1985		
S ₃₇				社堂	土間	1間	3柱2瓜穿闘式	切妻杉皮葺	1945以前		

9名である。宿泊には蘇洞の民家の1室を借りることを希望したのだが、従江県民族事務委員会の許可をえることができず、下江鎮の「下江旅社」を宿舎とした。蘇洞での調査の後、浅川・島田・羅の3名は、従江県の高増寨や銀良寨でも鼓楼・群倉などの調査をおこなった。

1-2. 家屋番号について

蘇洞上寨は、本論で詳述するように、家屋数37（附属舎を除く）・世帯数44・人口218の、悉皆調査の対象としてはまことに手ごろな規模をもつ村落である。調査と報告の便宜上、集落内の主要な家屋37棟については、S₀₁~S₃₇の家屋番号を与えている（表1）。Sは蘇洞（Sudong）のイニシャルをとった。37棟の家屋のうち、

社堂（S₃₇）と闘牛房（S₂₁）以外の35棟が住居である。また、高倉については、所有世帯の家屋番号の後にkをつけて、たとえばS_{22k}のように表現した。なお、南はずれのS₃₄・S₃₅と北はずれのS₃₆がベース・マップの範囲外に位置する。ベース・マップ内の全戸に対しては、詳細な実測調査と世帯構成の調査をおこなったが、S₃₄・S₃₅・S₃₆の3棟は概略的な調査にとどまった。

2. 蘇洞上寨一村の構造と景観一

2-1. 調査地域

貴州省の黔东南苗族侗族自治州は1市15県76区からなり、今回調査した蘇洞は州東南縁辺の従江県下江区に属している（図1）。貴州高原の支流をあつめた都柳江は、

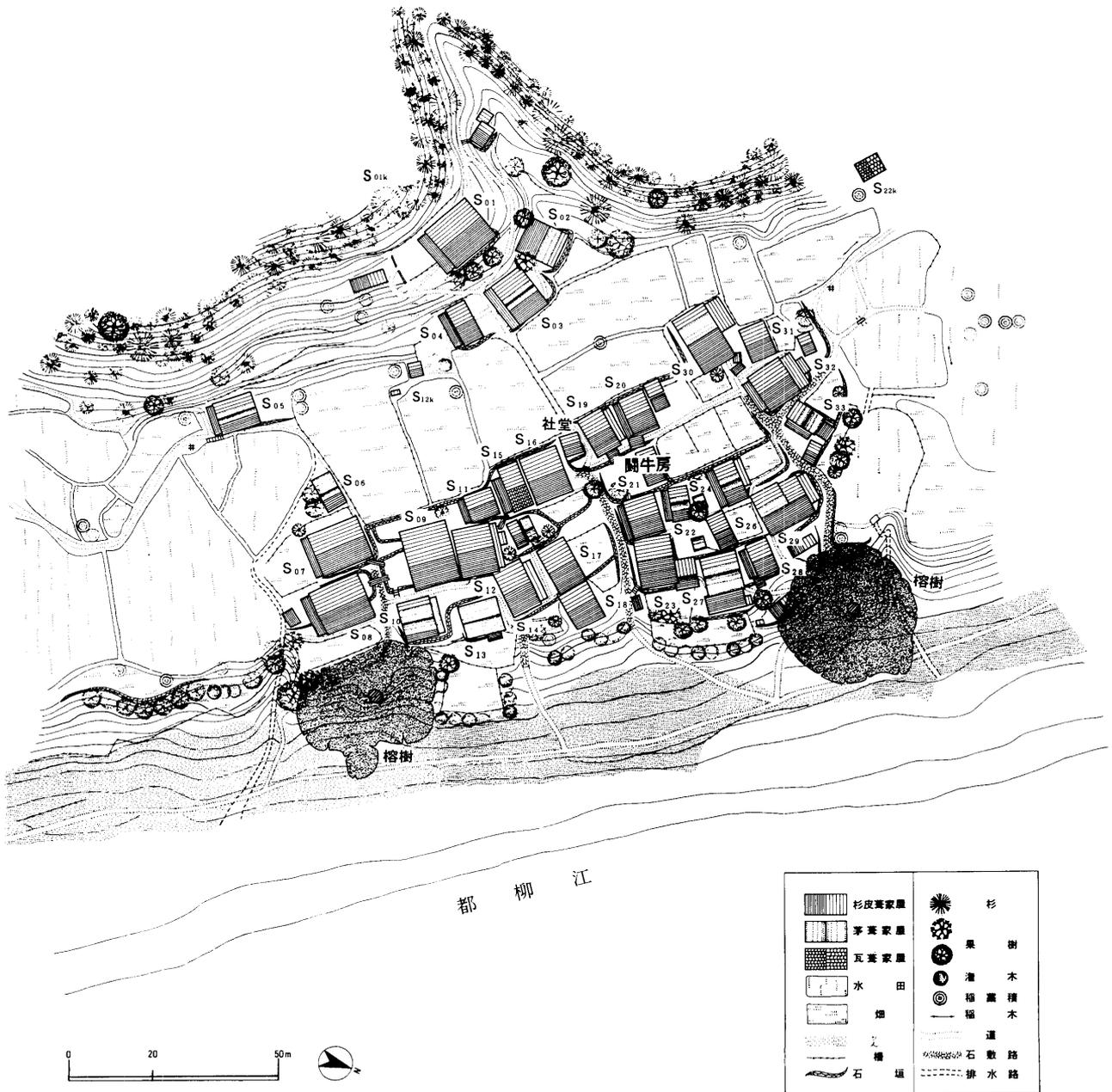


図2 屋根伏図

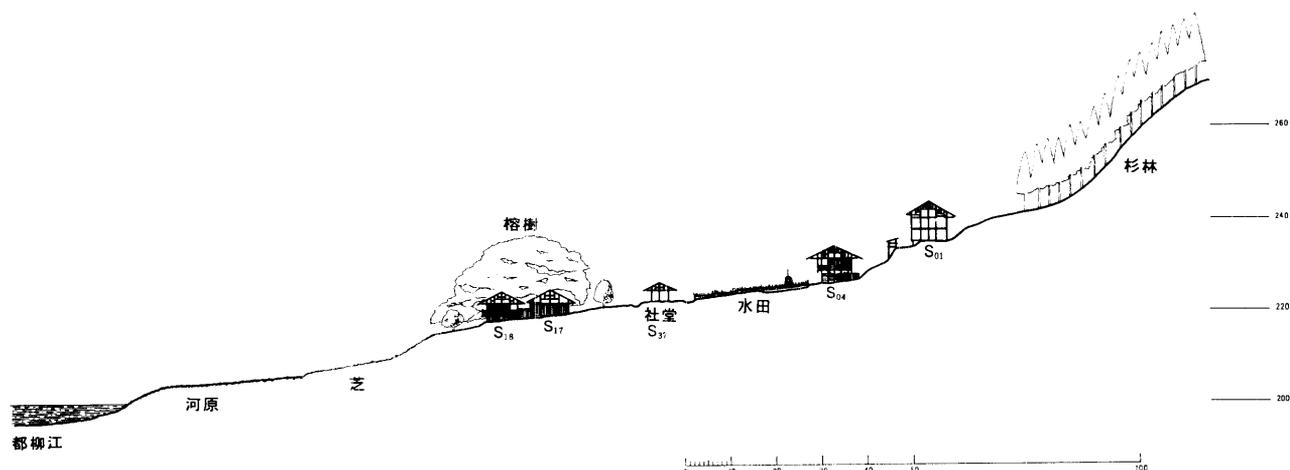


図3 地形断面図

西隣の榕江県から従江県を横断して広西壮族自治区三江侗族自治県の老堡口まで東流し、そこで潯江と合流して融江と名を変え、柳州まで南流する。この溪谷地域には、多くのトン族集落がみられる。前回調査した巨洞や郎洞、そして今回調査した蘇洞は、いずれも都柳江流域のトン族村落なのである(図2)。

従江県には、州内の他の県市と同じように、トン(侗)族、ミャオ(苗)族、漢族、ヤオ(瑤)族、スイ(水)族、チワン(壮)族などの多数の民族が居住している。州全体では漢族の人口が最も多いのだが、従江県では総人口243,000人のうちミャオ族が39.8%、トン族が38.9%を占め、漢族はむしろ少数派であり、少数民族の自治性がより強くなっている。人口形成では、ミャオ族とトン族ではほぼ勢力を二分しているが、この両者は民族性に大きな差異が認められる。トン族は溪谷に定住して稲作農耕を営む高床居住民、ミャオ族は山間部で移動性の高い焼畑農耕を営む土間系居住民なのである。

さて、従江県の下江区は、清代に下江庁、民国時代に下江県と呼ばれ、独立した行政単位を形成していたが、1941年に永従県と合併して従江県が誕生し、その後は従江県内の1区を構成するようになった。下江区の中心地は、榕江県城と従江県城のほぼ中間に位置する下江鎮である。下江鎮は都柳江を航路とする水運の要衝であると同時に、朝市や定期市の開かれる経済交換の核でもある。人口の大半は漢族が占めているが、市場が催されるときには、周辺農山村の少数民族や家船に住む蛋家などが各々の特産品をもちより、多民族融合の一大バザールに変貌する。

下江鎮対岸のわずか上流に位置する蘇洞は、上寨と下寨という血縁関係のある兄弟村落に分かれている。我々が調査したのは上流の上寨のほうであり、下寨はその下流約1kmにあって、上寨よりもやや規模が大きい。伝承によれば、蘇洞寨の成立はそれほど古い時代にさかのぼらない。蘇洞の先民たちは、もともと下江鎮に住んでい

たのだが、清朝が下江庁を置くにさいして、少数民族を下江から追い払い、トン族の多くは都柳江の水辺に、ミャオ族は山の上に落ちのびた。そして、このとき散り散りになったトン族を美称化した「疏洞」が村名となり、新中国成立後に「蘇洞」に改められた、という。下江と蘇洞との位置関係や疏洞と蘇洞の音声の近似関係からみて、この伝承の信憑性はかなり高いといえよう。

なお、蘇洞上寨の村長・石万年氏一家(S12)の墓は上寨と下寨のあいだの山の上であり、乾隆丁酉年(1777)8月11日に生まれ道光22年(1842)4月16日に亡くなった石万伝氏の墓碑が残されており(道光26年完成)、18世紀後半までに蘇洞集落が成立していたことがわかる。

2-2. 集落の空間構造

(1) 龍脈

龍脈とは、風水のことである。蘇洞の村人だけでなく、都柳江流域のトン族は、村の龍脈を異常に尊重しているが、この地域に風水先生はいない。周知のように、福建に代表される華南各地の漢族村落では、風水先生が独自の知識を駆使し、家・墓・集落の配置と方位を決定するのだが、この辺りでそのようなことはおこなわれない。

村の龍脈は、トン族一人ひとりの頭のなかに、自明のものとして了解されており、いわば民族の集合表象、もしくは一種の文化規範となっている。集落の背後には踊る龍のような山嶺が連なり、前方には生命線ともいえるべき都柳江 *nya yong* が流れる。河川には南面するのがいちばんよいが、東面するものわるくない。つまり、集落は前方の河川に南面もしくは東面しながら、山 *jing* と川 *nya* とのあいだの河岸段丘に所在すべきものなのだ(図3)。

さらに、河岸と集落の境には、大きな一對の榕樹(ガジュマル) *mei ling shu* が植えられている。この2本の榕樹は、あたかも集落世界への巨大な門のようであり、集落全体を庇護する遮蔽物のようでもあり、また天上世

界に連なる宇宙樹のようでもある。

蘇洞上寨の地形的背景となる龍脈とは、かように単純なものではないが、繰り返すまでもなく、これはトン族が無意識のうちに共有する空間構成の規範的な概念を具象化したものである。その証拠に、都柳江流域の蘇洞下寨、八沙寨、臘俄寨、郎洞寨、巨洞寨などのトン族集落は、いずれもまったく同じ空間的配置をとる(ただ、集落の規模によって榕樹の数が変化する)。また、子供たちの描いた集落のスケッチ・マップにも、必ず山・川・榕樹が現れる(図4)。

(2) 家屋の類型と配置

3本の石敷路

蘇洞上寨には、3本の石畳の道路 *gen mag* が都柳江から山側に向かって東西に通る、そこから南北にのびた小道 *gen ong* に面して家屋 *gan* が配置されている。3本の石敷路のうち両わきの2本は榕樹の根本を入口にし、中央の石敷路は社堂(祖母堂)に突きあたる。いずれの石敷路も、シンボリックな要素を始点もしくは終点にしていることに注意しておきたい(図2・5)。



図4 子供の描いた蘇洞の地図



図5 家屋の類型分布

住居の種類とその属性

37棟の家屋 (S₀₁~S₃₇) のうち、S₃₇が社堂 (祖母堂)、S₂₁が闘牛房で、残りの35棟はいずれも住居建築である。今回の調査で最も驚いたことの1つは、この35棟の住まいが高床式に限定されず、土間式・吊脚楼 (懸造) 式・楼閣式をもふくんでいたことであった。89年の第2次調査までは、訪れるトン族集落のすべての家屋が高床住居であったように記憶しているが、蘇洞ではちがっていた。その内訳を示しておこう (図6~9)。

- ①高床式(18棟)……S₀₂~₀₅・S₀₇・S₀₉~₁₂・S₁₄~₁₆・S₁₈・S₂₂・S₂₅・S₂₉~₃₀・S₃₄
- ②土間式(12棟)……S₀₆・S₁₃・S₁₇・S₁₉~₂₀・S₂₄・S₂₆~₂₈・S₃₁・S₃₃・S₃₅
- ③吊脚楼式 (4棟)……S₀₁・S₀₈・S₃₂・S₃₆
- ④楼閣式 (1棟)……S₂₃

①の高床住居は村にながく住みついた、いわゆる「本地」(石姓が多い)の本家筋に多くみられる(図10)。一方、②~④はいずれも土間居住を基盤とする家屋だが、それぞれの意味はいささか異なっていた。まず、1棟しかない④の楼閣式は、1階を主要生活面としつつ2階にも寝室・倉庫を置く重層建物で、居住様式としては最も漢化した住居であり、建物のづくりも上等だ。居住2世帯のうちの1世帯の主人は、下江区政府の幹部だという。

これに対して、②と③は高床住居に住みたいのだが、財力の関係で土間居住を余儀なくされている世帯の、いささか質素な住まいである。その居住者は、

- A. 他村からの移住者……S₁₇・S₂₄・S₂₇~₂₈・S₃₅・S₃₆
- B. 老人……S₁₉・S₂₆・S₃₁
- C. 分家した若い世代……S₀₁・S₀₆・S₀₈・S₁₃・S₂₀・S₃₂・S₃₃

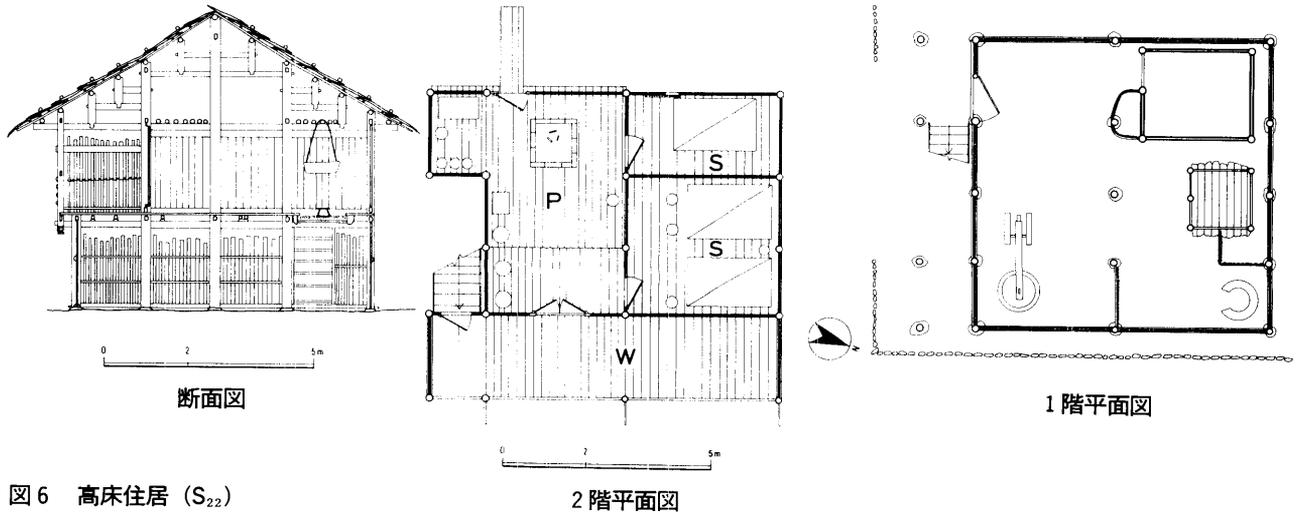


図6 高床住居 (S₂₂)

2階平面図

1階平面図

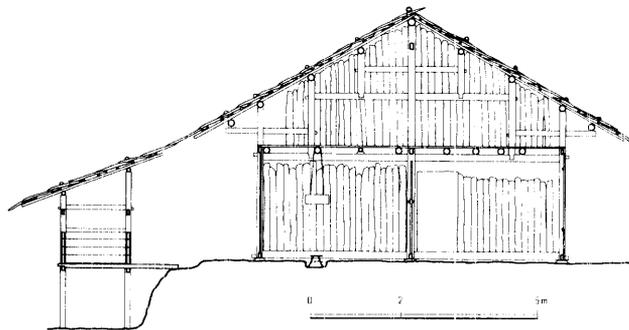


図7 土間住居 (S₁₉)

断面図

平面図

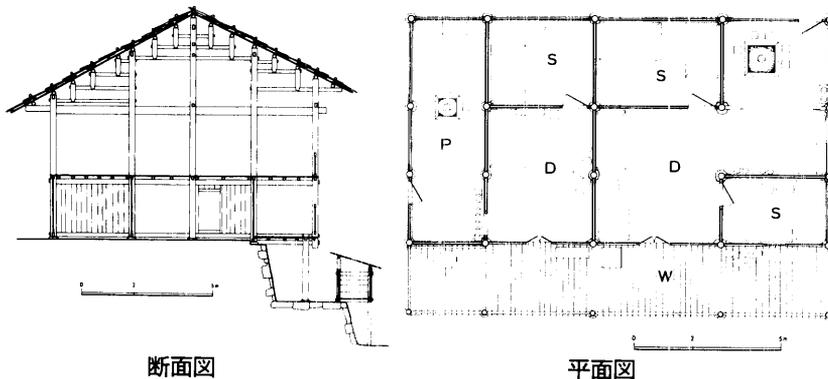


図8 吊脚楼 (S₀₁)

断面図

平面図

などに分けられる。この一群(②・③)にとって、①の高床式と④の楼閣式は、一段ランクの高い羨むべき住居なのだが、じつはこの②および③の内部においても、

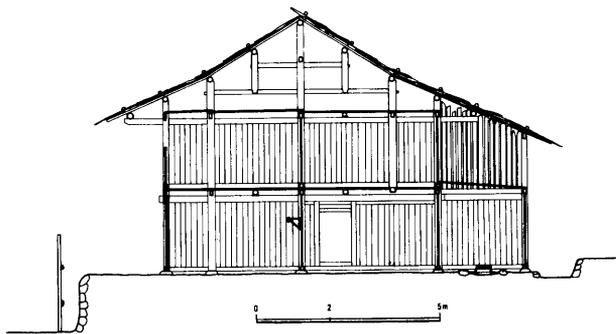
- a. 当初から土間居住を前提にして建てられた住居
- b. 高床居住が可能な骨組構造としているが、床板や壁板を購入する経済的余裕が今のところないので、仮の土間住まいをしている住居。将来的には家屋を完成させ、高床居住する(図11)。

という階層性が認められる。S₀₁・S₀₈・S₁₃の3棟が、未完成のまま居住がなされたbタイプの住まいである。

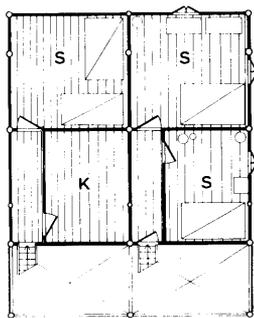
以上のように、住居の形式は、居住者の出自、経済力、年齢などによって多様な様相を示しており、いくつかの類型が共存するところに蘇洞集落の特徴がある。



図10 姓の分布



断面図



2階平面図

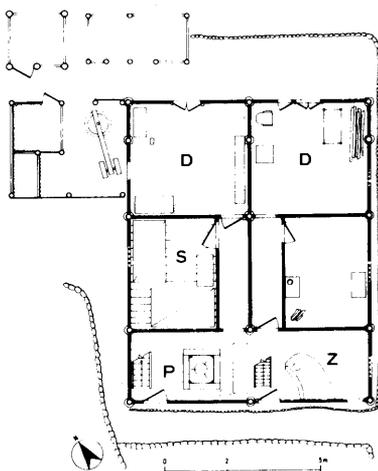
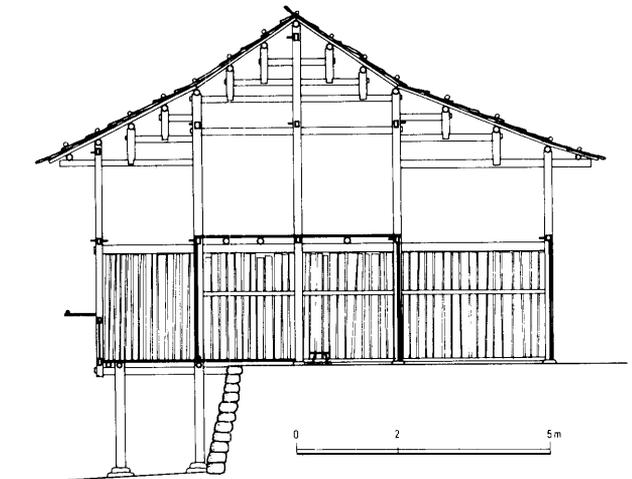
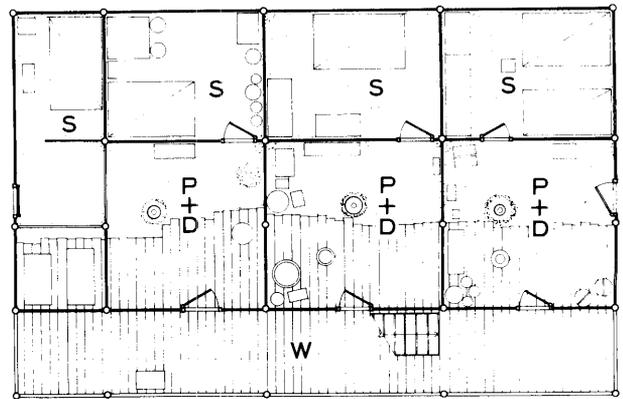


図9 楼閣(S₂₃) 1階平面図



断面図



平面図

図11 未完成の高床住居(S₀₈)

社堂と闘牛房

蘇洞には鼓楼がない。蘇洞だけでなく、下江区の都柳江沿岸集落にはほとんど鼓楼がみられない。鼓楼や風雨橋などの大規模な建築をつくるだけの財力が村にないからである。しかし、鼓楼や風雨橋のない景観のほうが、トン族集落のより古式の姿を伝えるものと位置づけるかもしれない。

鼓楼のない蘇洞集落のなかで、社会的かつ宗教的な中枢としての役割を担う公共施設は社堂である。社堂、もしくはそこに祭られる女神は、トン語で *sa mag* と呼ばれる。*sa* は「始母＝祖先の女性」を意味する名詞、*mag* は「偉大な」を意味する形容詞であり、漢族はこの建物を「祖母堂」もしくは「先母壇」と呼ぶ。

すでに前報 [貴州トン族住居調査委員会 1991a] でも報告したように、巨洞にも鼓楼はないが、社堂 (G₁₂) はあった。巨洞の G₁₂ は、床高 1 m 弱の低い高床式で、正方形平面、四方吹放しの建築であり、内部では 2 カ所に囲炉裏を切り、納戸のように閉鎖的な小部屋を 1 室設けていた。これに対して、蘇洞の社堂 (S₃₇) は、桁行 1 間×梁間 2 間の長方形平面、3 柱 2 瓜穿闘式^{せんしゅう}の架構、切妻杉皮葺の土間式建物である (図12)。また、開口部は前面の片開き戸のみで、他の壁面は豎板壁として内部を閉鎖する。

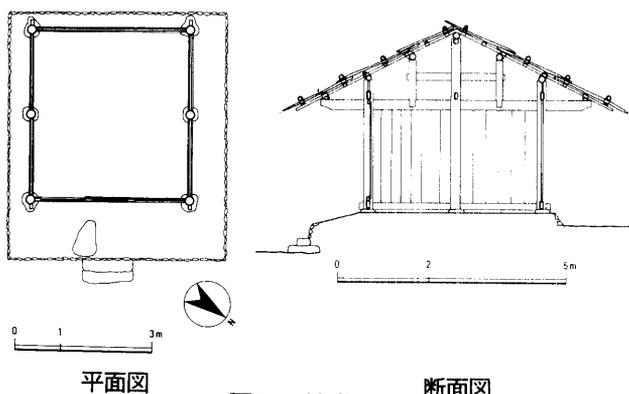


図12 社堂

後述するように、民国34年 (1945) 年に発生した都柳江の大洪水によって、村の建物は社堂をのぞいて全壊の憂き目にあった。村大工の林肇基氏 (70歳・S₀₇) によると、かれの生前から、社堂はこの位置にあったという。たしかに、他の住居建築以上に材の風蝕が著しい。また、部材相互の納まりは建築年代の早い社堂のほうが、むしろていねいにみえる。清朝末期から民国初期ごろの建築とみるのが、妥当であろうか。

社堂の門が開けられることは、めったにない。管理人の石国明氏 (S₂₃) 以外で、この内部をみた人はほとんどいない。このように禁忌に包まれた建物なのだが、古老からの聞取りによれば、「紙傘」(唐傘) 1 本が御神体として納められているという。

それでは、なにゆえ社堂の御神体が、唐傘であるのか。その意味をよく理解する村人はいなかったが、傘が雨水から身を守る道具であることを素直に解釈すれば、それは、ときに村を全壊させることさえあった大雨と洪水からの守護を願うシンボルのように思われてならない。さて、いま一つの問題は、なぜ村神が女神なのか、という点だが、上寨の村長によれば、一家は祖先の男性が守護するが、村の全地を守護するのは先祖の偉大なる女性なのだという。これは、トン族にとって、ごく自然な考え方のようであった。

社堂の祭りは、1年に1回、春節 (旧正月) 元旦の日に催される。この日は、村中の人々が社堂に参拝する。少し前までは、月に1回闘牛がおこなわれるとき、やはり社堂に参拝し祭宴を催したという。

その闘牛は、社堂の北東に隣接する広場でおこなわれていた。広場の北端に建つ S₂₁ は、1980年に村大工の林肇基氏の手になる闘牛房^{トウニウファン}であり、村有の水牛を養っていたのだが、今は空き家になっている。

闘牛場として利用される以前のこの広場には、村有の高倉が建っていた。収穫時には、社堂と高倉が一体となった領域が、かなりシンボリックな意味をもっていたにちがいない^(註4)。

高倉と井戸

稲の穂束や糶を収納する高倉 *so* は、かつて蘇洞でも多くみられ、群倉を形成するところもあったというが、民国34年の大洪水ですべて濁流に呑み込まれ、その後はわずか3棟が再建されたにすぎない。高倉が建設されなくなったのは、やはり経済的な理由からであるという。倉もまた大工に依頼して建設する家屋であり、工賃や材料費がかなりな負担になるのである。以下に、現存する3棟について述べておこう。

① S_{01k} (図13) 先述した村有の高倉を、呉佩賢氏 (S₀₁の長男) が買って自宅近くに移築したもの。村長によれば、1966年ごろの建築であるという。平面は収納室が1間×1間で前面に幅の広い縁廊がつき、垂花柱^{クワ}で支えられる。棟木は垂花柱と背面側柱の中点を通り、東 (瓜) で支えられる。2柱2瓜前面垂花柱という、やや変わった架構をもつ。床高 1.96 m。

② S_{12k} (図14) 村長・石万年氏の高倉。1989年に完成した最近の倉である。収納室はやはり1間×1間だが、縁廊に垂花柱がつかない。2柱1瓜式の素朴な架構で、床高も約 1 m と低い。

③ S_{22k} (図15) 孜温^{ニクウエン}に住む親戚 (S₂₂の死んだ主人の兄弟) の倉を1984年に買い取って移築した。村の北西のはずれに位置する。やはり1間×1間の収納室に縁廊がつくが、垂花柱は用いず背面と同じ通し柱で縁廊を支える。架構は3柱4瓜式の変型で、通し柱は両側柱のほか前面入側通りに立ち、棟木は東が支える。S_{01k}に近い架構

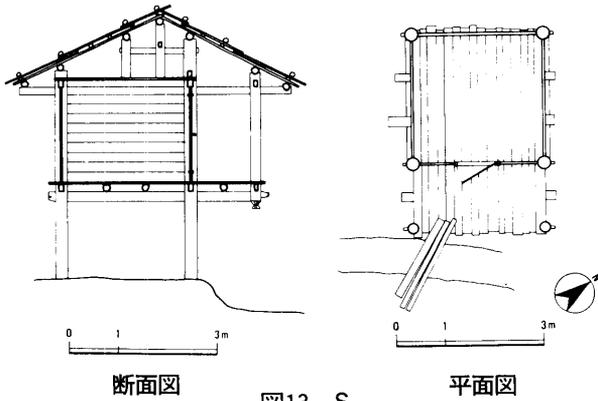


図13 S_{01k}

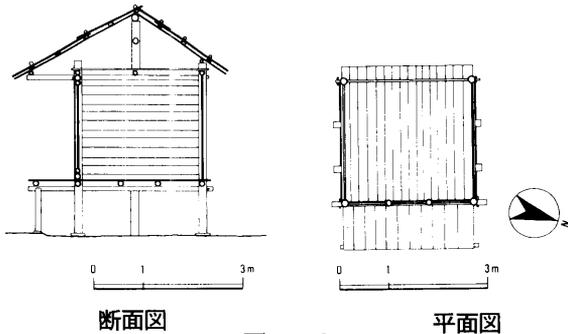


図14 S_{12k}

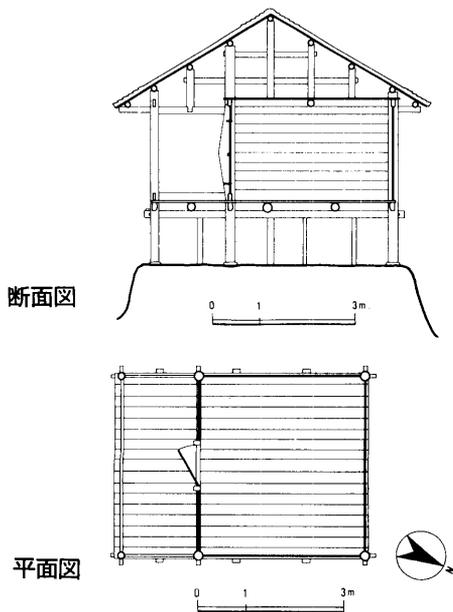


図15 S_{22k}

で、建築年代は不明だが、3棟のなかでは最も作りがみごとである。屋根を瓦葺とする点も特異だ。床高約1.4 m。

井戸は、集落の北はずれと南はずれの2カ所にある。北はずれの井戸はS_{22k}の南東に位置し、石組の井戸枠と石敷の洗い場をともなう。また、石敷の洗い場には、陶磁器の破片をはめこんで、「一九八六年十月十二日建」という銘が記されている。一方、南はずれの井戸はS₀₅の東

向いの水田のわきにあつて、こちらは、素掘りの井戸である。

(3) 周辺の土地利用

水辺の空間

都柳江に接する水辺も、集落外の重要な生活空間である。水際には、多くの板船 *lou* が停泊している。板船は、漁労と渡しの両用に使われる。川と集落のあいだは、石ころばかりの河原 *ba nya* と芝のような低草 *nei nyan* に覆われた緑地に分かれる。もっとも、降水量に応じて水際は刻々と変化し、我々の滞在中にも、大雨の降った10月18日の翌朝、都柳江の濁流は榕樹の際までせまってきた。かつて、村を襲った大洪水を想像させるに足る大雨だった。

川辺は、水くみ場や洗い場として、村人の重要な生活空間であるのはいうまでもないが、そこは同時に家畜たちの憩いの場でもある。アヒルたちは朝夕必ず川で水浴びし、ギャアギャア鳴きながら、川辺をちょこちょこ歩きまわっている。水牛たちも夕方には、芝の上でのんびりと尻尾をふりながら、雑草を食む。そして、日差しの暖かいときには、ゆったりと都柳江につかって水浴びするのである。

水田・畑・杉林

集落の南北には水田 *ga* と畑地 *dei*、背後の山の斜面には杉 *mei* の林がひろがる。トン族は西南中国を代表する稲作農耕民族であり、調査時はちょうど稲の刈入れから裏作（油菜・大根など）に移行する端境期と重なり、さまざまな農耕技術を観察することができた。また、貴州トン族は杉（広葉杉）の植林をおこなうことでもよく知られており、稲と杉の組み合わせだったその田園景観は、秋田や吉野とみまがうばかりである。

3. 住居

3-1. 間取りと空間利用

まずは、高床系と土間系に分けて住まいの空間構成を分析しておきたい。

(1) 高床住居の空間構成

床下の空間構成

床上（^{ロウシヤン}楼^上 *wu gong*, *wu lou*）を人間、床下（^{ロウシヤン}楼^下 *wu dee gong*）を家畜にあてる高床住居の空間構成は、蘇洞でも同様である。床下には豚囲い（^{チウチエン}猪^圈 *dang gou*）、水牛囲い（^{スイニウチエン}水牛^圈 *dang goi*）、鶏囲い（^{チウチエン}鶏^圈 *dang gai*）を設けるとともに、脱穀用の踏臼（^{トウイウ}碓^臼 *doi*）を置く。家畜囲いは、いずれも家人が手づくりする。鶏圏はたんに柵をめぐらせた素朴なものだが、猪圏と水牛圏は板^{じやく}決りのついた径15~20cm ぐらいの丸柱を4~6本立て、横板^{オウシコ}落^{込み}の壁をとりつける。もちろん天井はなく、高床住居の床がその代用となる。また、猪圏の場合、低い床を張ることが多いが、水牛圏に床は張らない。

床上空間の構成要素

蘇洞は30数棟の家屋によって構成される小集落であるにもかかわらず、住居の間取りは多様に展開しているが、各住居の主要生活平面を構成する要素は、つぎの6室(W・P・S・K・D・Z)しかない。

- W 縁廊 (走廊 *wuba*)
P 囲炉裏部屋 (火堂間 *gee puei*)
S 寝室 (房間 *gao sum*)
K 穀倉 (穀倉 *so gou*)
D 堂屋 (堂屋 *tang wu*)
Z 竈つき厨房 (灶房 *gee sao*)

ここでは、各室の機能と性格を概述しておく。

①縁廊(W)：高床住居および吊脚楼において、主要階の最前列を通る吹放しの廊下部分を指す。土地の言葉ではウッパー(*wupa*)という。ウッパーは通路であると同時に、居間もしくは客間でもあり、条凳や卓子を置いている。葬式や結婚の際、宴席を設けて来賓を接待する空間でもある。巨洞では、縁廊に2～3台の機織り器が置かれ、女たちが盛んに布を織っていたが、蘇洞上寨ではほとんど機織りをみなかった。また、別棟の高倉や稲木が少ない蘇洞では、稲の収穫後、ウッパーの手すりや貫に稲穂をかけて乾燥させていた。

②囲炉裏部屋(P)：炉のことをサプイ(*sa puei*)、炉の切られた部屋をゲップイ(*gee puei*)という。ここにいうプイ(*puei*)が「火」を意味しており、略号のPは、このイニシャルである。高床住居の炉は、それ自体を支える床下の柱をとともわず、梁行方向の貫に側板をわたして、その下端に底板をはめこんでいる。床板との接点には、側石をならべて框とするものが多い。

③寝室(S)：寝室はガオスーム(*gao sum*)という。略号のSは「眠る」ことを意味する *sum* のイニシャルを採用した。すでにどの家にも、4脚つきの寝台(*zhang*)が浸透している。

④穀倉(K)：既述のように、蘇洞上寨では別棟の高倉を設けることが少なくなったため、穀倉は住居内部にとりこまれるようになった。高倉はソー(*so*)といい、とくに稲倉を指すときにはソー・ゴウ(*so gou*)という。住居内に置かれる場合でも、呼称はまったく同じである。高床住居の場合、階段室の上部もしくは妻庇の一部を稲倉にあてる例が最も多い(S₀₅・S₁₀・S₁₂・S₁₅・S₂₉)。そのほか、身舎の一部に比較的大きな収納室を設ける例(S₀₇・S₀₉)、横板落込みの壁構造を住居本体から独立させて床下・床上に設ける例(S₀₁・S₀₂・S₂₀)などがある。倉の扉はごくふつうの片開き戸とするものもあるが、古式の横板落込み戸を堅持している倉庫室も少なくない。この場合、方立の内側に板決りをつけて、9～12枚ぐらいの板を順次落し込む。この扉板はいつでも同じ順番にはめこむ必要があるため、各板には下から順に一、二、

三……と記した番号の墨書がみられる。

⑤堂屋(D)：堂屋は、漢族住宅の中央間にみられる祖先祭祀のための公室で、日本でいうと座敷と仏間を合わせたような部屋である。日本の一般農家において、武家などの上層階級の邸宅からの影響で座敷が導入されたように、トン族もまた、漢族住宅の最もシンボリックな領域として、堂屋を住居のなかにとりこんでいった。それは、トン語の呼称 *tang wu* が、漢語の「堂屋」の音声そのものであることからあきらかである。すなわち、堂屋は住宅の「漢化」を示す指標でもある。

⑥竈つき厨房(Z)：竈もまた「漢化」の指標となる物質文化である。竈が導入されているのは44世帯中13世帯で、そのうち高床住居の床上の囲炉裏部屋に竈をもちこんでいるのはS₀₇・S₁₄・S₃₀の3軒だが、囲炉裏の機能を停止して竈のみを使っているのはS₀₇だけだ。そのほかの例は、家畜用の飼料を煮込むために、床下に小型の竈を置く例が大半を占める。

規模別にみた間取りの分析

図16は、高床系と土間系に分けて、規模別に間取りを分類してみたものである。高床系・土間系住居のいずれも、原則として、左寄りに堂屋・竈のないトン族本来の間取り、右寄りに堂屋・竈が導入されて漢化した間取りを配列している(レイアウトの関係上この原則に従わない例もある……S₀₃・S₀₅・S₀₇)。また、枠外右端には、参考となる他地域の住居の間取りを示している。以下では、高床住居の間取りを、身舎の桁行方向の柱間数(「間」)⁵⁰⁾ごとに検討しておく。

①1間タイプ：S₀₄・S₁₄・S₃₄の3棟のみ。村の南はずれに建つS₃₄は床下にP(囲炉裏と竈併用)、床上にPとWを置く変則的な高床住居である。S₁₄とS₃₄は、ともにWからDへ接続するアプローチをとり、PとSはDの側面もしくは背面に配列される。

②2間タイプ：最も標準的な間取りである。堂屋のみられないトン族本来の間取りを示すのはS₂₂(図6)で、Wから左間のPに入り、Sは右間に2室置く。漢族的なDもなく、別棟の高倉(S_{22k})をもつので、屋内にKを設ける必要もない。巨洞のT₀₄も2間タイプでほぼ同じ柱配置をもち、前から後に向かってW→P→Sの順に配列されている。S₂₂の場合、配列はいささか異なるけれども、やはりW→P→Sの序列性は認められる。DとZのない3室のみが、W→P→Sの序列をもって配列されたこの種の平面こそが、間取りの原型に位置づけられよう。

このオリジナル・タイプに、やや変化の兆しがあらわれるのが、S₂₅とS₁₀である。S₂₅では、梁間2間のPのなかに素朴な祭壇が置かれてDの萌芽がみられ、Sの一部にKを置く。S₁₀では、Pの背面に間仕切りをせず小さなDを設け、階段室上部にKを置いている。そのほかの

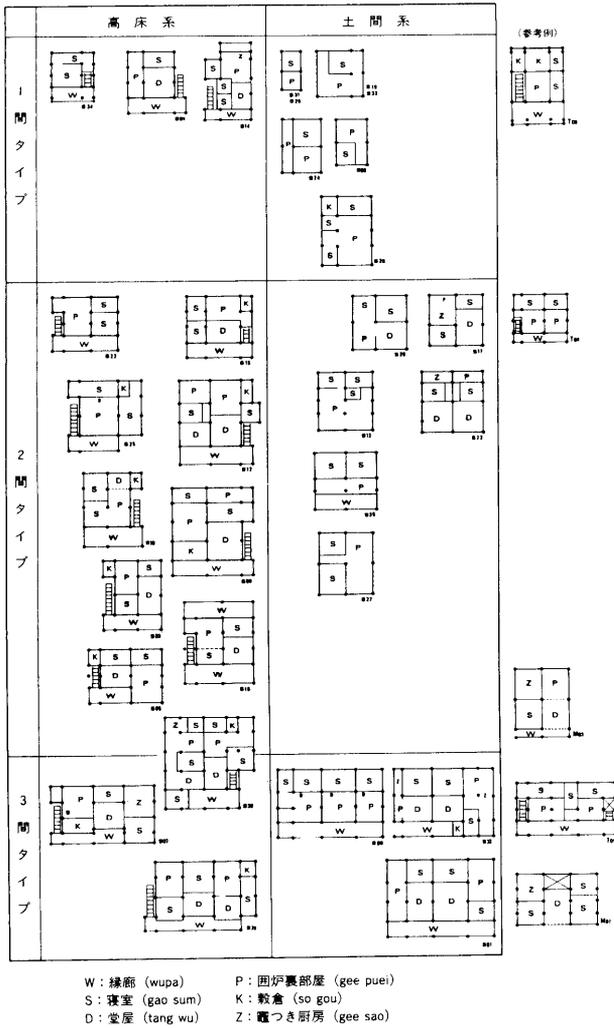


図16 間取り分類

2間タイプは、いずれも間仕切りのあるDをとめない、いずれもS₁₀のようなP→Dではなく、D→Pの序列性をもつ。堂屋が、それだけ格式化されてきているのだ。

Dの導入された2間タイプの典型と呼びうるのは、S₁₅ (図17)であろう。S₁₅では右間の前室にD、後室にPを置き、左間に前後2室のSを配する。Pの前面1室をDとして区切り、階段室上面にKを設けるところが、S₂₂と最も大きく異なる。このほか、S₀₃・S₀₅・S₀₉・S₁₆などの2間タイプは、D・P・S・Kの配列に若干の差異は認められるけれども、W→D、D→P、D→S、P→Sという4つの序列性はいずれも維持されている。

③3間タイプ： S₀₇・S₂₉・S₃₀の3棟。S₃₀は2間タイプを増築したものである。また、S₂₉とS₃₀は2世帯に分家されているから、3間タイプ本来の空間利用がなされているのはS₀₇のみといえよう。S₀₇は村大工の林肇基氏が設計・建設した自邸である (図18)。Wは左間・中央間のみで、中央間は前室をD、後室をS、左間は前室をK、後室をP+S (若夫婦用)、右間は前室をS、後室をZ (囲

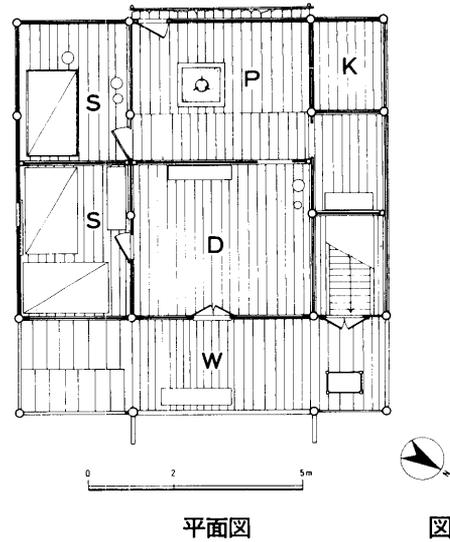
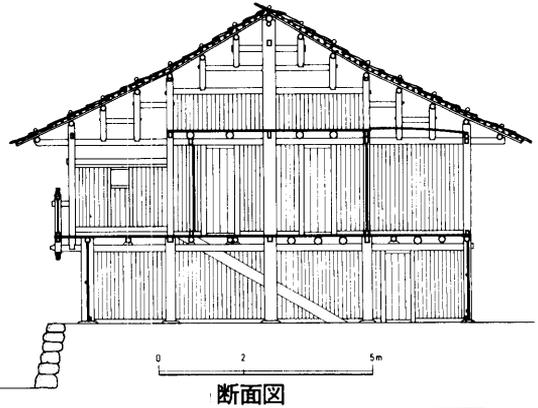
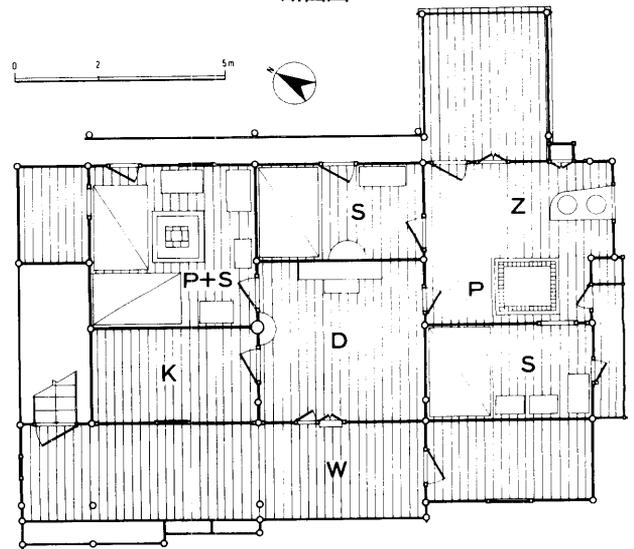


図17 S₁₅



断面図



平面図

図18 S₀₇

炉裏もあるが使われていない) とする。3間タイプの場合、Dが導入されるだけでなく、それが対称配置における中心性を帯びるので、間取り全体がより漢族住宅に近くなる。S₂₉も林氏の作品であり、当初はS₀₇とほぼ同じ平面だったのだろうが、2世帯に分割されたため、2間タイプを連結したような間取りに変化してしまっている。

(2) 土間系住居の間取り

床下空間は家の外

高床住居と土間系住居の決定的な差異は、生活面が2階か1階かという点のみにあるわけではない。土間系住居の場合、高床住居における床下空間がなくなるわけだから、床下に置かれるべき家畜舎と踏臼は、いずれも戸外に出さなくてはならない ($S_{19} \cdot S_{20} \cdot S_{23} \sim 24 \cdot S_{26} \sim 28 \cdot S_{33}$)。この一群には、踏臼をもたない家も多い。踏臼があるのは、 $S_{08} \cdot S_{23} \cdot S_{27} \cdot S_{33}$ の4軒のみだが、 S_{27} では野晒し^{のざら}しているため、すでに壊れていた。また、この4軒以外では、近所や血縁関係のある家の踏臼を使わせてもらって脱穀していた。

縁廊の有無

吊脚楼（懸造）式の住まいには縁廊（**W**）がそなわりますが、純然たる土間式住居にはそれがない。したがって、吊脚楼は生活面が土間系だが、間取りは高床住居に近くなり、また縁廊の下にできるわずかな床下空間を利用して家畜囲いを置くこともできる (S_{08})。

規模別にみた間取りの分析

つぎに、高床住居と同様にして、土間系住居の間取りを、桁行規模別に検討しておこう。

①1間タイプ： S_{26} と S_{31} は、ともに桁行1間×梁間2間で、前室を**P**、後室を**S**とする。この2例の場合、**P**（前）→**S**（後）という序列性がみられるが、同じ桁行1間身舎のみの S_{06} では**S**（前）→**P**（後）と序列が反転し、**S**のわきの通路で背面の**P**と表をつなぐ。このほか、桁行1間の身舎に片側のみ妻庇のついた $S_{19} \cdot S_{24} \cdot S_{33}$ も**P**と**S**からなり、基本的に**P**→**S**の序列性は生きているが、間仕切りがやや複雑になっている。 S_{20} は、さらに背面1スパン分だけ低い床張りとなり、その隅に**K**を設ける。

②2間タイプ：やはり**P**と**S**からなる類型が基本。 S_{13} は前面にひろい**P**を置き、背面に**S**を3室設ける。吊脚楼の S_{36} は、この最前列に板張りの**W**を置く間取りで、 T_{04} とよく似た**W**→**P**→**S**の序列性をもつ。 S_{23} は**P**を右間、**S**2室を左間の前後2室に分ける縦分割の間取りで、むしろ S_{22} に近い。さて、1間タイプでは**D**がみられなかったが、2間タイプになるとその萌芽が認められる。 S_{27} （**図19**）は右間前室に簡単な祭壇を設け、 S_{17} ではやはり右間前室にもう少し格式化された宗祖祭祀用の横長の卓子を置いて、あきらかに**D**としての性格を強化している。 S_{23} は既述のように、他の土間系住居とは異なる楼閣式の建物であり、縦割1間ずつを分配された2世帯のいずれもが、最前列に**D**を置いている。また、 S_{17} と S_{23} には、竈が導入されて**Z**が成立している。

③3間タイプ：いずれも吊脚楼。 S_{08} は分家した3兄弟に縦割1間ずつを分け与えている。どのスパンも、 S_{31} および S_{26} にみられる**P**→**S**の2間取りで、最前列に**W**が

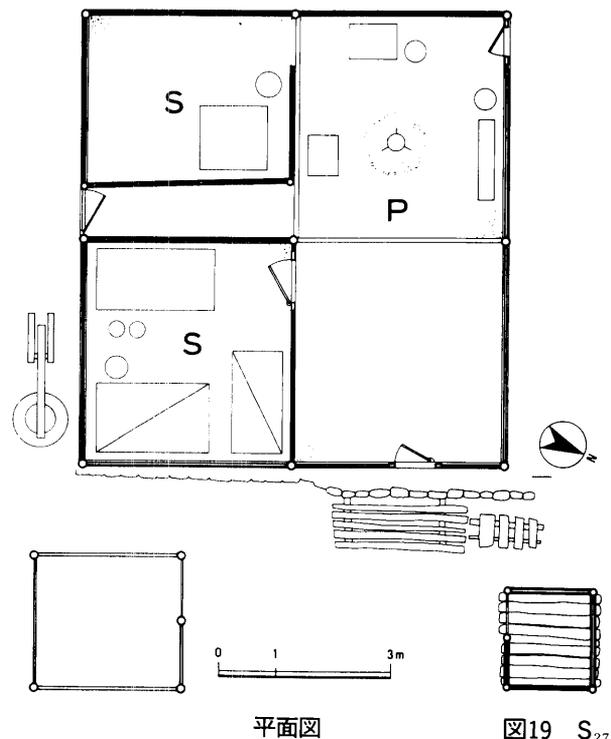


図19 S₂₇

通る。ただし、 S_{08} の**P**には小さな祭壇が置かれ、**D**も萌芽している（**図11**）。 S_{01} と S_{32} は3間タイプの平面を2世帯が分割利用するもので、ともに**D**を組み入れており、間取りとしては高床の S_{29} と同類である。

(3) 蘇洞住居平面の特質

蘇洞住居の平面的特質として、とくに重要な点を以下に整理しておきたい。

①漢化していない、という意味での高床住居の典型を示すのは、 S_{22} である。やや室配置は異なるが、巨洞の T_{04} と同じ**W**→**P**→**S**の序列がみられ、漢族的な**D**・**Z**は導入されず、**K**も別棟としているからだ。

②これに対して、漢化した高床住居の典型は S_{15} である。間取りは S_{22} とよく似ているが、**P**の前室に**D**を置き、階段室の上部に**K**を設ける。漢族住宅からの影響という点で**D**を組み入れ、大洪水以後高倉を生産しなくなった代用品として**K**を住居内にとりこむ S_{15} の平面は、蘇洞の高床住居を代表するものであり、このほかの2間タイプの多くも S_{15} の変型として理解しうる。

③最も漢化している高床住居は、**D**が空間的な中心性を帯び、**Z**も導入された3間タイプの S_{07} である。村大工の林氏の自邸である、という点に注目すべきだろう。

④土間住居と吊脚楼は、生活面は1階で共通するが、間取りでは**W**が吊脚楼にあり土間住居にないので、吊脚楼と高床住居に共通性がある。

⑤土間系住居には床下空間がないので、家畜舎や踏臼は戸外に置かれる。

⑥土間住居の平面の基本は**P**と**S**の2室構成であり、**D**を組みこむ家屋は高床住居にくらべてはるかに少な

い。財力の乏しい世帯が土間住居を建てるわけだから、格式化されたDをもたないのも当然といえよう。

3-2. 大工・構造・部材名称

(1) 村大工とその作品

蘇洞上寨には、村大工が1人いる。S₀₇の家長、林肇基氏がその人だ。林氏は、1920年生まれ70歳。幼少のころ、蘇洞の私塾で、広西チワン族の教師から白話漢文を学んだ。これまで3度の結婚歴があるが、2人の先妻は死に、今の妻とは1950年に結婚した。現在、次男の息子夫婦と同居中である。

建築は1958年から学び始めた。もともと趣味で建築が好きだったが、突然才能が開花して、1958年から家屋を建てることができるようになった。誰の弟子になったこともなければ、他の地方で大工として働いたこともない。蘇洞に住みながら、「独学」で建築技術を修得したという。

蘇洞では、これまで住居を10棟建てたが、2棟が廃絶して、今は8棟だけ残っている。その8棟とは、自邸(S₀₇)のほか、S₀₃・S₁₀・S₁₂・S₂₃・S₂₇・S₂₉・S₃₄である。村内のほかの住居は、他地域の大工が建てた。しかも、その他地域の大工とは、巨洞のトン族、摆亥のスイ族、湖南の漢族、下江の漢族などさまざまであり、林氏によれば、トンもスイも漢も「建物には大差ない」から、どの民族の大工でも問題ない。ただ、トン族とスイ族は2階に、漢族は1階に住むように設計すればいい、という。

(2) 架構の分類

下江鎮に住む漢族町大工の李和興氏によれば、穿闘式住居建築の「構架」とは、「排架」と「開間枋」(桁行方向の貫)と「標条」(桁・棟木)からなるという。「排架」は「立帖」ともいい、李氏の説明に従うならば、桁行方向の貫・桁・棟木をのぞいた、梁行方向の柱・束・貫の組み合わせを示している。

「立帖」にはさまざまなタイプがあるが、その形式は柱と束(「瓜」という)の数、および垂花柱(「吊瓜」という)の有無で表現される。蘇洞の高床住居の場合、すべてが5柱式であり、なおかつ「瓜」の数によって、5柱4瓜式、5柱6瓜式、5柱8瓜式に分かれる。さらに、これに「吊瓜」がつくものが多いが、その場合でも、前面にのみ付加されるタイプと前後両面に付加されるタイプに分かれる。当然のことながら、「瓜」が多ければ家屋の梁行規模が大きくなり、「吊瓜」が付加されれば家屋の装飾性が上がる。

(3) 部材の呼称体系

図20は、林氏が1968年に自ら設計・建設した自邸(S₀₇)の断面模式図に部材名称を書き入れたものである。この住居は、上の分類にいう「五柱八瓜式」、すなわち5本の柱と8本の束を用いた穿闘式の架構をもつ。また、梁行方向の柱間は「排」、山形をなす梁行断面の向かって右

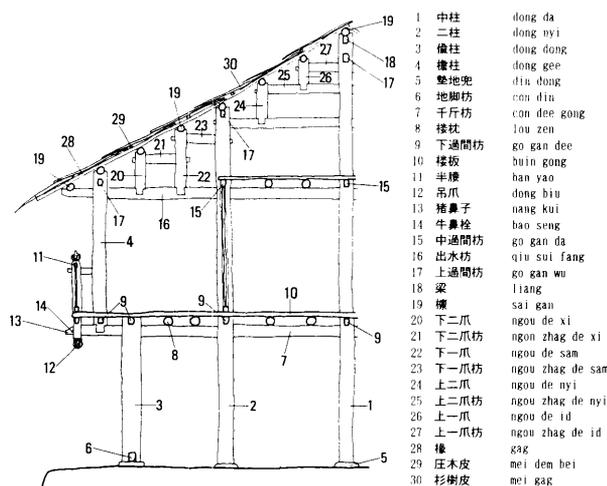


図20 部材呼称

側が「東山」、左側が「西山」と表現されるので、図20は「西山二排」の断面を示している。

以下には各部材の呼称を、

「漢語」、トン語^{註6)}、(図20の部材番号)

の順に示して解説する。

まず柱だが、棟筋の通し柱(棟持柱)を「中柱」*dong da*(1)、入側筋の通し柱を「二柱」*dong nyi*(2)という。*dong*は「柱」、*da*は「中」、*nyi*は「二」であるから、漢語もトン語も意味は同じである。側柱筋では、床下と床上で柱が切り離され、床下のそれを「偷柱」*dong dong*(3)、「檐柱」*dong gee*(4)という。「偷柱」を指す *dong dong* のうちの後のほうの *dong* は、「偷」の音訳の可能性はあるが、「檐柱」の *gee* については意味不明。「檐柱」はいわゆる垂花柱のことだから、一般的には「吊瓜」と呼ばれるが、S₀₇の場合、縁廊の手すりが垂花柱よりも前にせり出しているため、林氏は垂花柱を「檐柱」、手すりの柱を「吊瓜」*dong diu*(12)と呼び分けた。原則的には、垂花柱の筋に手すりが通るので、「檐柱」=「吊瓜」の関係が成立する。

柱の基礎は、石の礎盤が「塾地兜」*din dong*(5)、家屋の外周柱列をつなぐ足固め貫が「地脚枋」*con din*(6)という。「中柱」・「二柱」・「偷柱」をつらぬきつつ「檐柱」を支える床下の貫は、「千斤枋」*con dee gong*(7)という。以上の3例をみると、*con*は「枋」(貫)、*din*は地面もしくは基礎を指す語彙とみなせよう。また、「千斤枋」という呼称は、この貫が上層の荷重を一手に承ける重要な部材であることをよく示している。

先述のように、手すりの柱を林さんは「吊瓜」*dong diu*(12)と呼んだが、手すりそのものは「半腰」*ban yao*(11)という。*ban yao*はあきらかに「半腰」の音声である。「千斤枋」は「吊瓜」をも突きぬけ、その外側に木鼻をつくる。木鼻は豚の頭を象っており、「猪鼻子」*zhu bi zi*

(13)と呼ばれる(漢語の「猪」は豚を意味する)。トン語の *nanɡ kui* も「豚(*kui*)の鼻(*nanɡ*)」の意であり、漢語の意識であるにちがいない。木鼻と「吊瓜」の接点は、鼻栓で固定する。鼻栓は、「牛鼻 栓」*baɔ sɛŋ* (14)という。参考までに述べておくと、柱と貫の接合には、むしろ込み栓を多用する。込み栓は「杷齒 栓」と呼ばれる(トン語は不明)。

床板、すなわち「楼板」*buin ɡoŋ* (10)を支える桁行方向の横材のうち、根太は「楼枕」*lou zen* (8)、柱筋を通る貫は「下過間 枋」*go ɡan dee* (9)という。*lou zen* はあきらかに「楼枕」の音訳である。一方、「下過間枋」とは、「間」(桁行方向の柱間)をぬける貫のうち「下」にある材を意味し、同種の材には「中過間 枋」*go ɡan da* (15)と「上過間 枋」*go ɡan wu* (17)がある。(9)(15)(17)のトン語呼称のうち、共通する *go ɡan* は「過間」の訛った音声で、(9)の *dee* は「下」、(15)の *da* は「中」、(17)の *wu* は「上」を意味する。この3部材のトン語呼称は、漢語の意識と音訳を織りまぜている。

小屋組の束と貫についても、体系だった呼称が与えられている。高い位置にある材から、順にならべてみると、

①束

「上一瓜」*ŋou de id* (26)

「上二瓜」*ŋou de nyi* (24)

「下一瓜」*ŋou de sam* (22)

「下二瓜」*ŋou de xi* (20)

②貫

「上一瓜枋」*ŋou zhag de id* (27)

「上二瓜枋」*ŋou zhag de nyi* (25)

「下一瓜枋」*ŋou zhag de sam* (23)

「下二瓜枋」*ŋou zhag de xi* (21)

となる。漢語の場合、「中柱」-「二柱」間を「上排」(上の列)、「二柱」-「檐柱」間を「下排」(下の列)と呼んで、束・貫ともに上から「一」「二」という番号をふっている。これに対して、トン語の呼称では、「上」「下」という列の区別を設けていない。「瓜」(*ŋou*)もしくはそれに付随する「枋」(*zhag*)を、上から順に第一(*de id*)、第二(*de nyi*)、第三(*de sam*)、第四(*de xi*)と呼び分けているのである。

垂木は「椽」*ɡag* (28)という。垂木を意味するトン語の *ɡag* は、柱を指す *dong* などとともに、数少ないトン族固有の用語の1つである。垂木を支える桁の類は、軒桁・母屋桁・棟木を一括して、「標」*sai ɡan* (19)と呼ぶ。ここにいう *ɡan* とは家の総称である。垂木の上に葺く広葉杉の樹皮は「杉樹皮」*mei ɡag* (30)、それを上から押さえつける丸太材は「圧木皮」*mei dem bei* (29)という。

(4) 漢族建築としての高床住居

以上、蘇洞住居の平面、空間利用、構法、部材呼称などを記述してきたが、これらの諸要素には、いずれも「漢

化」の様相が認められる。このうち平面については、堂屋(D)が漢族住宅的要素の代表だが、肇興・錦所・啓蒙などで主流をなしたDが中心性をもつ3間タイプの間取りは、*S₀₇・S₂₉*をのぞくとみられない。また、竈(Z)もわずかながら導入されているが、床上で囲炉裏にとつてかわる例は *S₀₇*しかなく、多くは床下に置かれ、家畜の飼料を煮込むために使われていた。第2次調査までの成果と比較すると、蘇洞の平面は、巨洞ほどには古式さを残していないが、肇興・錦所・啓蒙ほど漢族住宅に近づいていない。

ところが、構法に目を向けると、ほとんど穿闘式一色に塗りつぶされており、その点では、巨洞より肇興、錦所、啓蒙などに近い状況を示している。とくに注目すべきは、この種の構法を用いた高床住居が、トン族だけでなく、漢族やスイ族の大工によっても建設されてきた、という事実である。じつは、筆者らが滞在した下江鎮でも、ミャオ族の大工が他村からきて漢族の家屋を建設しており、逆に下江に住む漢族の大工はかなり遠いミャオ族の山村にでかけて仕事をしていた。このように、トン族・ミャオ族・スイ族の住居建築は、相互に他民族の大工による建設が可能であり、建築技術にはあきらかに民族を超えた互換性がある。ではなぜ建築技術に互換性があるのかといえば、それは漢族の技術がベースになっているから、と考えるほかないだろう。

それは、部材呼称にもはっきりと表れていた。柱を指す *dong* や垂木を指す *ɡag* をのぞくと、ほとんどの部材のトン語呼称は漢語呼称の意識もしくは音訳なのである。

ただ、こういきってしまうと、漢族住宅の木造構法とトン族の高床住居の構法がなにも変わらないことになるが、じつはそうでもない。下江鎮に住む漢族の町大工・李和興氏によると、少なくとも下江の近辺では、「吊瓜」下端の処理の仕方が、漢族とトン族では異なるという。すなわち、トン族の場合は、「吊瓜」が床下の貫の下にまでのび、その下端に葱坊主状の彫刻が施され、貫と束は鼻栓で固定される(図21)が、漢族の場合は「吊瓜」の下端が貫の先端の仕口にはめこまれて込み栓で固定され、束と貫の仕口との隙間に六角形の「盤子」を挿しこむ(図22)。たしかに、下江鎮で建設中の漢族住宅でも、この「盤子」をつくっていた。

要するに、蘇洞の住居は、平面からみると、ようやく「漢化」の萌芽が認められる程度にすぎないが、構法・技術的には、細部にわずかな独自性がみられるとはいえ、かなり激しい変容を遂げているのである。

しかも、興味深いことに、この種の変容もしくは同化は、蘇洞だけでなく黔东南のほぼ全域において認められる。筆者は、第1～2次調査の段階まで、このような建築的変容を「漢化が進んでいる」という程度の印象で受

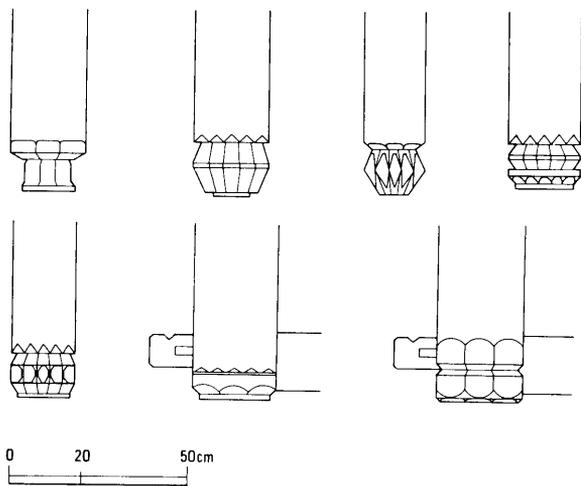


図21 トン族住宅の吊瓜

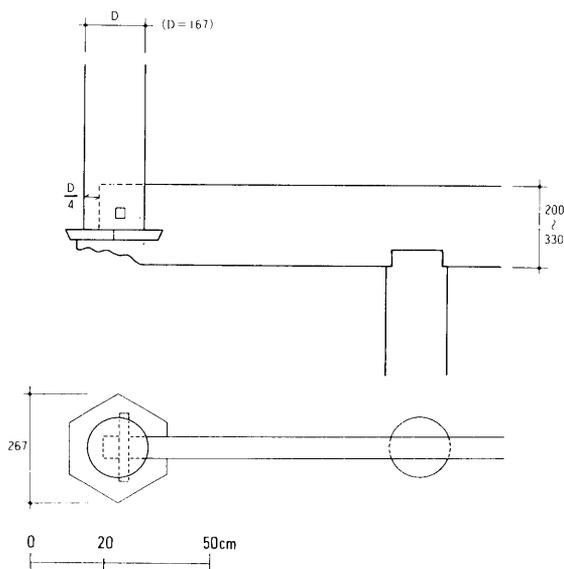


図22 漢族住宅の吊瓜

け止めていた。しかし、蘇洞での集中的調査の結果、それは「漢化」というようなレベルを超えていると思うようになってきた。構法もしくは技術の面からみた場合、トン族の高床住居は漢族建築に同化しきっている、といういさか過激な表現さえもが、おそらくは許されることだろう。

ただ、注意しておきたいのは、器としての住まいがいかにか漢化しようとも、高床居住そのものはけっして放棄されていないということだ。また、囲炉裏を中心とする居住スタイルもかたくなに守られており、このあたりに、トン族のエスニシティをかいまみることができる^{#7)}。

4. おわりに

蘇洞は、なんの変哲もない、ごくありふれたトン族の村だ。増衝や往洞のような立派な鼓楼があるわけではなく、巨洞のような古式の群倉を残すわけでもない。黔東

南のどこにでもみられる、規模の小さな^{トンザイ}侗寨の1つにすぎない。しかし、鼓楼や風雨橋のようなモニュメンタルな建物、あるいはそれらをそなえた大規模な村落が、必ずしもトン族文化の典型をなしているわけでもなからう。むしろ、蘇洞のようなごく「ふつう」の村落のほうが、より普遍的で基層的なトン族文化を表出している、という見方もできるかもしれない。

その点において、蘇洞のもつ「平凡さ」は、我々異国の調査者にとって、このうえない魅力であった。トン族にとっての平凡さは、我々にとっての解説すべき異文化そのものであり、新鮮な情報の網目にほかならないからである。

じっさいこの調査によって、多くの新しい知見がもたらされた。村落を統制する龍脈と禁忌の数々。出自、経済力、年齢などに対応しつつ、多様な姿をみせる住居群。平面・構法から住様式全般におよぶ漢化の浸透度。このほかにも、本稿ではとりあげられなかったが、結婚・出産・葬式の習俗からみた室空間の意味や、スケッチ・マップを通してみた村人の空間認識など^{#8)}、さまざまな側面の情報をえることができたのである。

手前みそではあるけれども、この蘇洞でのフィールド・ワークは、おそらく西南中国の対外未開放地域の少数民族集落を対象とした初めての本格的な調査であり、ここでえられた上述の諸データは、西南少数民族の住居と集落に対するこれまでのイメージを覆すほどの新鮮さをもつものであると、調査メンバー一同自負している。もっとも、あえて告白しておくならば、調査期間が短かったところにいちばんの憾みがある。調査の最低ノルマと考えていた集落内家屋の全戸実測をクリアしたとはいえ、居住習俗、祭祀、社会組織などについての観察や聞き取りは、不十分なまま帰国の途につかざるをえなかった。それが心残りではあるが、いつかまたトライできる機会もめぐってくることだろう。

(文責 浅川滋男)

<注>

- 1) 年報所載の梗概 [貴州トン族住居調査委員会 1990a] のほかに、これまでの主要な成果としては、貴州トン族住居調査委員会 [1990b, 1992], 浅川 [1989, 1990abc, 1991ab], 黄 [1990, 1991], 周 [1989, 1990], 宮本 [1990] などがある。また、本委員会の調査とほぼ同時期に、少なくとも3つの外国人研究グループが貴州少数民族建築の調査を進めており、その成果も公表されている [鈴木 1990, 頼 1991, 阿久井 1991]。
- 2) 調査・研究のスケジュールを丸1年遅らせることができたのは、住宅総合研究財団のご理解とご厚情以外のなにものでもない。この場を借り、あらためて感謝しておきたい。
- 3) 蘇洞の龍脈と禁忌については、貴州トン族住居調査委員会 [1992] にくわしく報告している。
- 4) 1990年12月に調査した沖縄本島名護市我部祖河でも、かつてウタキ (御獄) の前方に、神酒をつくるための初穂を収納したミニ高倉の礎石跡が残っており、蘇洞との共通性を示している [浅川1991b]。

- 5) 前報〔貴州トン族住居調査委員会1990a〕に対する講評(1991年度年報)で、筆者らの用いる「間」が、日本民家の基準尺である「間」と混同され、まぎらわしいという疑問が示されていた。しかし、中国建築史(および日本の社寺建築史)の分野では、桁行方向の柱間を「間」と表現するのが常識となっている。
- 6) 本稿におけるトン語の表記法は、漢語の拼音表記にはば準じている。この点については、江口一久助教授から多くのご教示をえた。最も注意していただきたいのはeが〔ə〕, eeが〔ε〕に対応していることである。
- 7) 住まいにおける漢化とエスニシティの問題については、さらに浅川〔1991a〕を参照されたい。
- 8) 注3)に同じ。

<文献>

阿久井喜孝

- 1991 「中国西南地域の少数民族に生きる伝統的木造建築」『日中建築』No.31

浅川滋男

- 1989 「貴州苗族の吊脚楼」『建築雑誌』6月号
- 1990a 「中国の民居(3)―南方少数民族の高床住居―」『日中建築住宅情報』11月号
- 1990b 「中国の民居(4)―華南の平地式住居をめぐる―」『日中建築住宅情報』12月号
- 1990c 「貴州トン族の村から」『奈文研所内報』184号、1990年
- 1991a 「漢族建築だった高床住居―住まいにみる貴州トン族の漢化とエスニシティ―」『すまいるん』19号
- 1991b 「高倉の民族考古学」『クラと古代王権』直木孝次郎・小笠原好彦(編), ミネルヴァ書房
- 1991c 『住まいの民族建築学的考察―華南とその周辺』学位請求論文(私家版)

貴州トン族住居調査委員会,

- 1990a 「貴州トン族の高床住居と集落構成に関する調査と研究(1)」『住宅総合研究財団研究年報』No. 16 平成元年度
- 1990b 「中国・貴州の高床住居と集落―黔東南のトン族とその周辺―」『住宅建築』4月号
- 1992 「蘇洞―貴州トン族の村―」『住宅建築』(近刊)

黄 才貴

- 1990 「日本専門家学者対貴州侗族干欄民居的調査與研究」『貴州文化』10期
- 1991 「日本学者対貴州侗族干欄民居的調査與研究」『貴州民族研究』2期

周 達生

- 1989 「中国のカワウソ漁」『アニマ』204, 平凡社
- 1990 『民族動物学ノート』福武書店

鈴木解雄

- 1990 「黔の国の木造民居と生活」『生活文化史』No.17

宮本長二郎

- 1990 「高床建築のルーツを探る―長江流域から米作りとともに普及―」『日本人と江南文化―最新日本文化起源論』学研

頼 福林

- 1991 『貴州少数民族民居之実測研究』国立成功大学建築研究所第二十二屆碩士論文, 台南

<研究組織>

主査	田中 淡	京都大学人文科学研究所助教授
委員	周 達生	国立民族学博物館教授
"	宮本長二郎	奈良国立文化財研究所建造物研究室長
"	上野 邦一	奈良国立文化財研究所遺構調査室長
"	浅川 滋男	奈良国立文化財研究所研究員
"	島田 敏男	奈良国立文化財研究所研究員
"	羅 徳啓	貴州省建築設計院長
"	黄 才貴	貴州省民族研究所助理研究員(トン族)
"	郭 湖生	東南大学建築研究所教授
"	楊 昌鳴	天津大学建築系講師
協力	江口 一久	国立民族学博物館助教授
"	巽 淳一郎	奈良国立文化財研究所主任研究官
"	譚 鴻賓	貴州省建築専科学学校長
"	金 珏	貴州省建築専科学学校副教授
"	陳 肖龍	貴州省科学技術協会国際部項目協調員
"	鐘 映輝	從江県科学技術協会主席(ミャオ族)
"	梁 之槐	從江県民族事務委員会主任(トン族)
"	呉 超榮	從江県民族事務委員会幹事(トン族)

図面作成協力

朝倉元子・川口純代・小森志保・瀬本真弓・高石陽子・高瀬知子・高瀬由紀・瀧波香陽子・土井初恵・中島規子・船附久美子・冬野雅子・村田和子・矢野真美(五十音順)